

みんなで

え ひ め

詠媛！！

～愛媛を詠もうプロジェクト～

愛媛大学附属高等学校 3年

森野莉穂

はじめに・・・

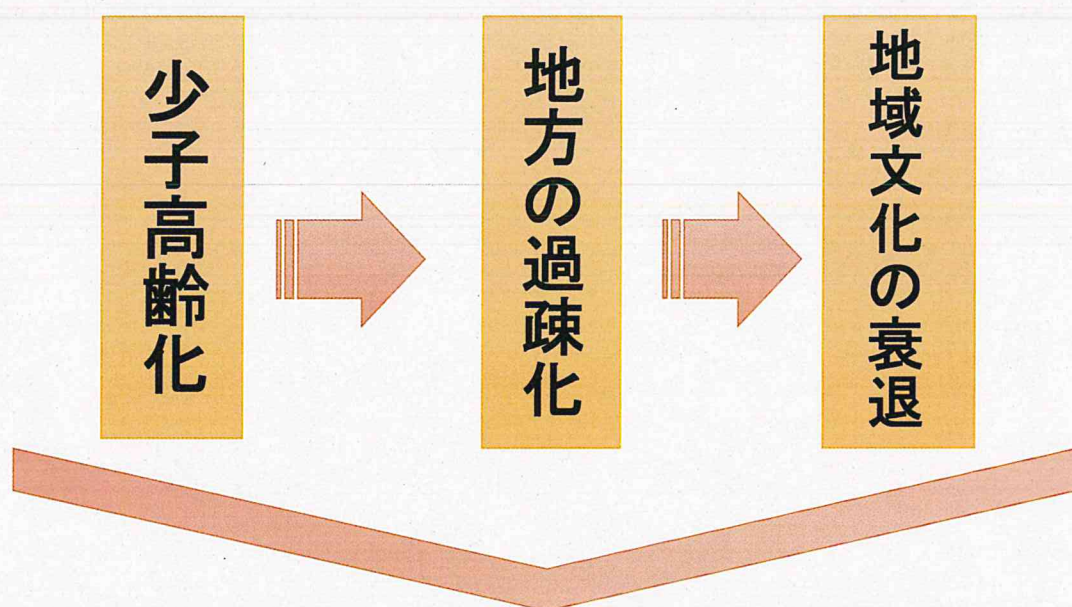
— 愛媛の国語教育を発展させたい！ —

私は将来、国語科の教師になりたいと考えている。そう思うようになったのは高校の授業で俳句に出会ってからだ。五七五の短い文の中に季節感溢れる情景や作者の心情が繊細に表現されている俳句。そんな俳句の面白さや楽しさを伝えるために、新しい取り組みを通して次の世代に繋ぎたいと考えている。

— 愛媛の方言を守りたい —

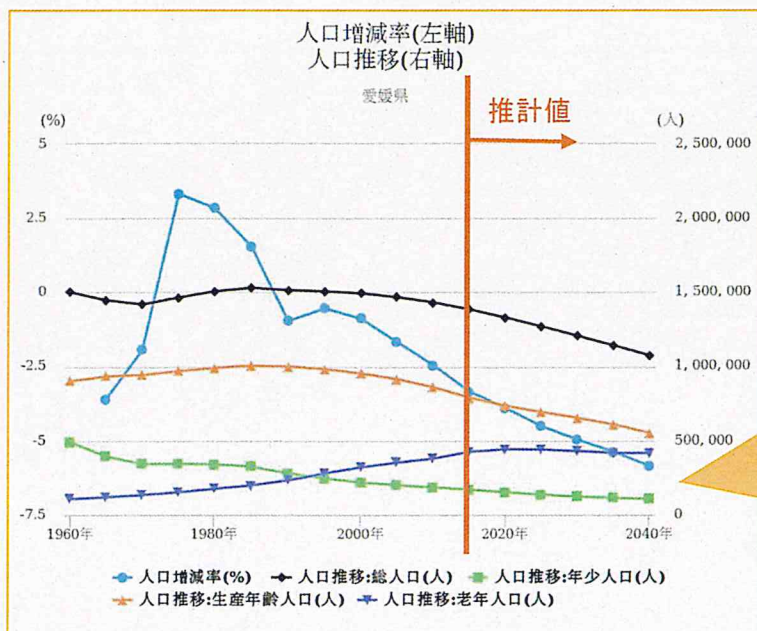
愛媛には伊予弁という長い歴史の中で受け継がれてきた方言がある。しかし、高校の授業で方言について学んだとき、生徒も知らないような伊予弁があることに衝撃を受け、生まれたときから慣れ親しんでいる言葉だからこそ、私達はその魅力や新鮮さを無意識のうちに失っているのではと考えるようになった。そこで、私のアイデアで伊予弁の魅力を再発見し、伊予弁に対する県民の意識を高めたいと考えている。

愛媛の伊予弁・俳句文化があぶない！



伊予弁・俳句の消滅危機

現状① 《愛媛は今、少子高齢化の真っ最中！》



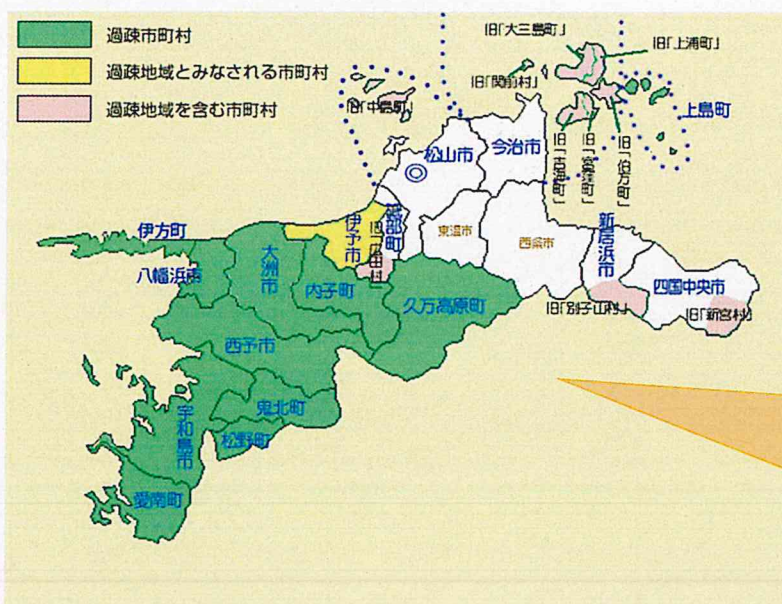
このままだと・・・

若者が減りつづけ、
高齢者が増え続ける

超少子高齢化社会に！！

【地域経済分析システム (RESAS:リーサス) より】

現状② 《進みつつある愛媛の過疎化》



南予と中予の南側
の過疎は特に深刻！！

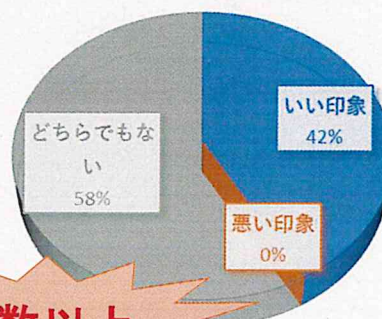
【全国過疎地域自立促進連盟ホームページより】

現状③ 《高校生の伊予弁・俳句に関する意識の現状》（愛媛大学附属高等学校の生徒 152 人への意識調査より集計）

「柔らかい感じがする」「親しみやすい」といった良い印象のほか、「田舎な感じがする」「よく分からない」といったマイナスイメージも。

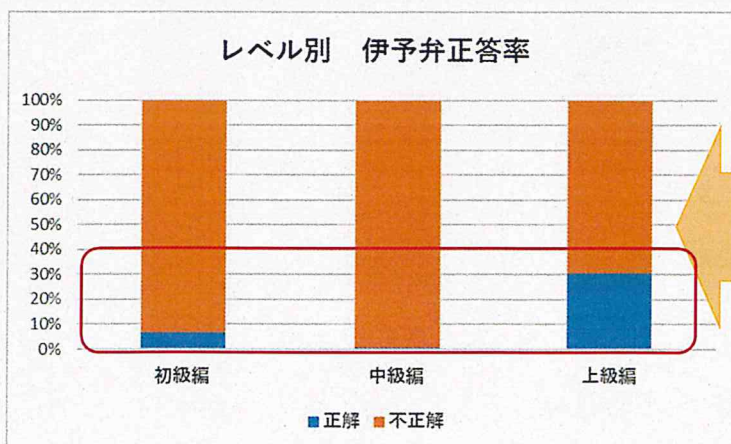
→伊予弁についての認識が曖昧化し、地域の言葉としての自覚や誇りが薄れている

高校生がもつ伊予弁のイメージ



半数以上

レベル別 伊予弁正答率



どのレベルも正答率が 40%を下回っている

→伊予弁の正しい使い方や言葉の意味といった基礎的な知識が欠如している

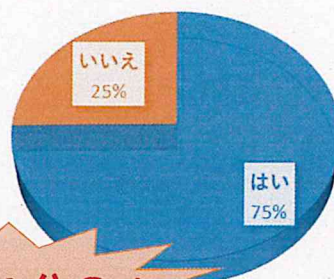
※調査の際に使用した各伊予弁のレベル設定については「教えて先輩！愛媛大いろは」の「【シリーズ】伊予弁拡散希望①②③伊予弁に触れよう。(上級編・中級編・初級編)」に基づいて設定しました。

「馴染んでいる」「使いやすい」「大切にしたい」という意見がある一方で、「標準語で話すべき」「使うと田舎な感じがする」といった声も。

→伊予弁の継承・使用に

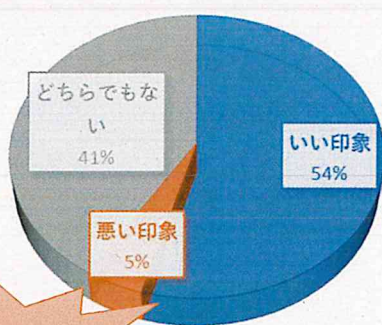
やや消極的

(問) これからも伊予弁を使いたいですか？



全体の4分の1

高校生がもつ俳句のイメージ



半数近く

「伝統的」「詠むことが楽しい」「愛媛の誇れる文化」といった俳句を高評価する傾向が強いが、半数近くの高校生が「難しい」「興味がない」「作るのが面倒」のようなマイナスイメージを持っている。

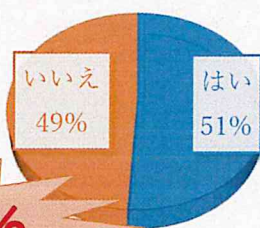
→俳句に対する苦手意識が高い

「作ると楽しい」「伝統的」「面白い」という肯定的な意見があったが、「興味がない」「面倒」「機会がない」といった俳句に対する関心の低さが伺えた。

→高校生が俳句と触れあう機会が少

なく、興味・関心が低い

(問) 今後、俳句を鑑賞したり詠みたいですか？



約50%

《意識調査のまとめ》

- ・ 高校生が俳句や伊予弁と触れあう機会が少ない
- ・ 伊予弁や俳句に対してコンプレックスや苦手意識がある
- ・ 伊予弁や俳句の基礎的な知識が欠けている
- ・ 文化を継承することに関して消極的、地域アイデンティティーが低い

伊予弁・俳句文化を未来に繋げ！一私が提案する解決法一

◎伊予弁を活用した俳句コンテストの開催

方言の使用を条件とした俳句コンテストを開催することで伊予弁に対する愛着を持ってもらうことを目的とする。現在開催されている主な俳句コンテストとして「俳句甲子園」があるが、このコンテストへ出場できるのは高校生だけであり、県内に世代を超えて参加できるコンテスト今のところ存在しない。

◎高齢者が講師の伊予弁講座

小中学校などの教育の場で、昔ながらの伊予弁の使い方や単語、歴史を高齢者が直接生徒にレクチャーし、高齢者と生徒の世代間交流を行う。お年寄りが生き生きと活躍できる場の提供や、若者の伊予弁に対する基礎的な知識や興味・関心の向上が狙える。

◎愛媛の特産品と伊予弁のコラボレーション

商品パッケージのキャッチフレーズや商品名を伊予弁仕様にする。ただ「ほうれん草」「愛媛県産 ミカン」と記載するのではなく、「愛媛のミカンやけん、食べてみてや!」「愛媛育ちのスマじゃけん、ほったおちらい!」という様に伊予弁独特の柔らかさ、温もりを生かして県内外に愛媛の地域ブランドを展開する。県民の伊予弁に対する愛着が高まるだけでなく、県外の人にも伊予弁の良さや愛媛のことについて知ってもらうきっかけになる。

◎伊予弁三行ラブレターコンテスト

伊予弁の使用が条件だが、俳句と違って三行ラブレターは季語などの縛りがなく、人と人との繋がりや感情面についても自由に表現することができ、俳句を詠むことが苦手な人でも気軽に作ることができる。若者の伊予弁に対する抵抗感やコンプレックスを改善し、県民と伊予弁との心理的距離の緩和を図る。

◎お城下ウォーク俳句 ver.

既存のお城下ウォークの地域資源や史跡を訪ね歩くシステムに付け加え、各名所のポイントで1句ずつ詠み、それを参加者同士で披露しあうというもの。コンテストと違って参加者全員が同時に制作し、その場で発表されるので、お城下ウォーク独特の臨場感が生まれ、俳句や愛媛の歴史、地域資源に対する親近感、が高まる。

まとめ

— 愛媛の言葉を永遠に —

伊予弁・俳句文化は形ないもの。だからこそ、未来に語り継ぐには県民一人一人の誇りが必要。今こそ、伊予弁・俳句文化の再興のとき！